『時空を超えて』

昨年１０月１日、他院（病院、診療所）の医師、看護師らと道南在宅ケア研究会を立ち上げた。今や９０％近くの人が病院や施設で亡くなる時代となったが、国は在宅医療を推進しようとしている。それは、純粋に国民のことを考えているのではなく、医療費の削減を目的としているだけに、多くの問題を抱えていると言える。

函館に帰ってきて５年。在宅ホスピスにも取り組んでいる中で、訪問看護師、ケアマネジャー、ホームヘルパーなど多くの熱心なスタッフと出会った。そして、入院と比べて、在宅ではより多職種スタッフとの連携が重要であることを改めて感じた。在宅で過ごすことの素晴らしさと合わせて、そのことを皆に伝えたいと思った。

１０月１４日、第１回定例会を開き、幅広い職種の方が約１５０名参加した。この記念すべき日に、特別講演として、福岡市で在宅ホスピスに力を注いでいる二ノ坂保喜先生（二ノ坂クリニック院長）より、「いのちと生活を支える在宅ケア」というテーマでお話していただいた。二ノ坂先生とは、私が福岡のＥ病院に勤務していた時代、１人の患者さんの在宅ケアを依頼した時が初めての出会いであった。

Ｔさんは、５１歳の現役医師であった。５年前、福岡で活躍していた彼は、リンパ節が腫れていることに気づいた。翌年、悪性リンパ腫の診断を受けたが、抗がん剤による治療を選ばず、自分自身の治癒力に賭けた。それまで福岡市の第１線の病院で、急性期、救急医療に従事していた彼は、その後、長野県、そして北海道へと勤務先を代え、残りの人生を地域医療に貢献することとなる。５年間くらいは順調な経過であったが、少しずつ病状に変化が見え始める。それでもＴさんは、辛い身体を押して、診療に携わっていた。

発病から５年後、Ｔさんは一時、自宅のある福岡に戻り、Ｅ病院のホスピス外来を受診した。この時、彼の心は、ホスピスと抗がん剤治療という対極の選択枝の中で揺れ動いていたが、結果として、後者を選んだ。私はホスピス長から依頼され、担当医となった。標準的な抗がん剤治療を２回行ったところ、幸いに効果は少し現れてくれた。２回目の治療を外来で受けた後、彼は北海道に戻って職場に復帰し、抗がん剤治療を続けた。

それから半年後、彼は再びＥ病院を訪れた。悪性リンパ腫の勢いは増し、リンパ節外にも巨大な腫瘍を形成し、既に全身状態は厳しいものであった。引き続き、抗がん剤治療に望みを託し、再入院となったが、新しい抗がん剤治療を開始したものの、病状は悪化する一方であった。

彼の苛立ちもピークに達していた。病室内ではじっとしていることができず、ベランダに出て、外の空気を吸ったり、室内を歩いたりと、何とか気を

紛らわそうとしていた。病室内は緊張感に包まれ、思うようにならない憤りは私にもぶつけられた。医師としても大先輩である彼の思いに応えることが出来ず、私は申し訳ない気持ちで一杯であった。

入院３日目の朝、妻を通して「１日でも早く自宅に帰りたい」という申し出があり、治療を中断して、急遽退院することとなった。Ｔさんに聞くと、「僕はそこを山荘と言ってるんだけど、本当に落ち着くんです。病院にいたら、もういらいらして駄目なんです。」と語った。妻からは、かねてから最後は在宅で死を迎えたいと思っている彼の意向を聞いた。その後の治療は、自宅から比較的近い場所で、在宅医療に取り組んでいる二ノ坂先生にお願いすることとなった。そして、約１ヶ月間、Ｔさんは住み慣れた山荘で過ごした。在宅でも抗がん剤治療を希望したため、二ノ坂先生と私は、しばしば相談して、希望に応えた。しかし、残念ながら病状は悪化していった。

５月連休中のある日、二ノ坂先生より電話がかかってきた。「先生にも治療の相談をしたいと言っているし、一緒に行ってくれませんか。」私は二ノ坂先生と合流し、先生の車に先導されて、Ｔさんの自宅へ向かった。どんどんと山の中に進み、３０分くらいしてようやく自宅に着いた。周囲からは余計な雑音がほとんど聞かれず、木の臭いが漂い、よく耳を澄ますと鳥のさえずりや風の音などが聴こえてきた。静寂で、かつ自然を身体全体で感じとれるような場所にＴさんの山荘はあった。

部屋に入ると、居間に置かれたベッドの上で身体を起こしている彼がいた。病院ではいつも張り詰めた気持ちで、表情も堅かったＴさんだったが、今まで見たことの無い穏やかな顔で出迎えてくれた。病院では得られない、ほっとした空間で過ごしているＴさんは、間違いなく満足気であった。

小一時間、治療のことを含めてお話をした後、私は帰路についたが、帰り際、奥様から手紙を手渡された。そこには、彼の直筆で丁寧に、これまでの感謝の気持ちが綴られてあった。数日後、ご家族一人ひとりに別れを告げた後、眠るように息を引き取ったことを二ノ坂先生の連絡で知った。

もし、この日、山荘に行かなかったら、私は、Ｔさんの気持ちを１００％理解することはできなかったかもしれない。正直、彼から強い口調で思いをぶつけられた時には逃げ出したい気持ちにもなった。しかし、住み慣れた山荘で過ごしている彼の姿を見たとき、病院という窮屈な場所から抜け出して１日でも早く自宅に帰りたいと思った彼の気持ちが理解できた。そして、困難な病気を抱えながら、仕事も続け、ここまで自分らしく一生懸命に生きぬいてこられた大先輩に対して、改めて敬意の念で一杯になった。

Ｔさんとの関わりを通じて、二ノ坂先生は、私に在宅医療の素晴らしさと、無限性を教えてくださった。あれから７年。その先生が、時空を超えて、函館に来てくれた。再会して、二ノ坂先生の優しい瞳と、在宅医療にかける熱い思いは、昔と何ら変わりないものだと感じた。と同時に、Ｔさんのあの穏やかな顔が何度も思い出された。

（平成 19 年 1 月 15 日　著）